

須坂学園構想基本方針（案）地域説明会 会議録

- 1 日 時：2025 年 7 月 23 日（水）19～21 時
- 2 対 象：第 1・2・5 ブロック
- 3 会 場：生涯学習センター
- 4 参加者：37 人
- 5 市教育委員会：
勝山教育長、中村教育次長、若林学校教育課長、安川係長、
後藤主任指導主事、北村指導主事、西原指導主事

◆参加者 ◇市教委

（1）教育の基本姿勢について

◆参加者 A

- ・私たちの時代と今は違って、子どもたちが勉強ばかりで、いじめも増えている。本来、人間社会はお互いに思いやり、助け合ってつくるものだと思います。
- ・今は「小中一貫教育から」というよりも、もっと国全体で「どういう教育がいいのか」「人を思いやれる人間を育てられるのか」を議論すべきではないか。教育のやり方そのものについて、もっと根本的な議論をしてほしい。

◇市教委

- ・人間性を育てることが大切だと考えております。私たちも 2 年間かけて議論を重ね、その中で、「特色その 4」として「多様性を包み込む教育」を掲げました。勉強だけでなく人間性を育てる教育を目指してまいります。
- ・先日、奈良県の義務教育学校を視察しました。新しい学校になり、生徒が変わってきた事例を紹介しましたが、須坂市においても子どもの未来のために新しい学校づくりを考えていきたいと思っております。

（2）6・3 制からの移行理由・子どもの意見反映の具体性・予算などについて

◆参加者 B

- ・この構想は 6・3 制を変えるものだと思うが、6・3 制は子どもの成長に合った制度だから続いてきたのではないかと。須坂市として、どんな問題があったから変えようとしているのか。
- ・子どもたちの生の声をどうやって聞くのか。アンケートだけでは不十分だ。生徒たちの直接の声を聞く機会を設けるべきだ。

・検討委員会のメンバーは誰なのか。市民に説明する責任があるのではないか。この学園構想にどのくらいの予算を使うのか。須坂市は財政が厳しい中で、どの程度の負担になるのかを知りたい。

◇市教委

・「6・3制を変える理由」ですが、学力調査で須坂市の小学校高学年の学力が全国平均より低い傾向が続いています。そのため教科担任制を早く導入し、専門教員による指導を行いたいと考えています。子どもの発達は戦後と比べて2年ほど早くなっているというデータがあります。さらに「中1ギャップ」と呼ばれる不登校の増加も課題です。これらを解決するために小中一貫教育を進めたいと考えています。

・義務教育学校と小中一貫型学校の二つの学校が混在する点については、規模に応じて最適な形を選んでいきます。教育内容は同一であり、混乱はないと考えています。

・子どもたちの声については、すでに中学校生徒会サミットなどで意見を聞いており、今後は小学生にも聞く予定です。

・検討委員会については、校長・教頭・担任教員・大学教授などが参加しています。ただし具体的な名前は非公開としました。市教委が責任を持って案を作成しました。

・予算については、約30年かけて段階的に進める長期計画であり、現時点で総額は示せません。第1学園ごとに時期を見て金額を提示していきます。

(3) 学校統合の順序・校舎について

◆参加者C

・第1学園から第4学園まで、順番に整備されると聞いています。そうすると、最初に自分の学校がなくなってしまう地域と、最後まで残る地域とで不公平感が出るのではないか。・第2学園や第3学園では新しい校舎を建てる計画があるのか。

◇市教委

・地域によって統合の順番に差が出る点についてのご懸念はよく理解しております。同時に複数の学園を整備することは財政上不可能であり、段階的に進めざるを得ません。また、校歌や校名などについては今後地域の皆さんと協議しながら検討してまいります。

・校舎についてですが、第1学園については具体的な建設案があります。第2、第3については現時点で詳細は未定ですが、小学校校舎は老朽化が進んでおり、新築が必要になる可能性が高いです。中学校については比較的新しいため活用を検討しますが、将来的には建替えも視野に入れています。

(4) 検討委員会の透明性・中1ギャップについて

◆参加者D

・本来、「検討委員会」として、メンバーも公表し、市民の前で議論すべきではないのか。学園構想は大きな決定であり、非公開で進めるのは不適切だと思う。

・「中 1 ギャップ」という言葉も全国的にはあまり使われなくなっている。科学的根拠が弱いのではないか。たった 1 年程度の議論で結論を出すのは拙速すぎる。もっと市民の合意を得る時間が必要だ。

◇市教委

・検討委員会についてですが、今回の委員会は条例に基づく審議会ではなく、市教委の検討組織です。条例に基づく審議会は「適正規模等審議会」があり、そちらは公開で実施しました。その答申を受け、市教委が責任を持って学園構想案を作成しています。

・「中 1 ギャップ」についてはご指摘の通り、用語としての使用は減っていますが、実際に須坂市でも中学 1 年次に不登校が増える傾向が見られます。これは小学校から中学校への情報の共有が十分でないことが一因と考えています。

・この構想はここ 1 年で急に出てきたものではありません。まず 2 年間、教育のあり方を議論し、その上でさらに 2 年間、適正規模等審議会で検討を行ってきました。その積み重ねの上で 1 年かけて今回の案を作成したものです。

(5) 小中一貫教育への期待・保幼小連携・特別支援学校との連携について

◆参加者 J

・私自身、30 年以上教員を務め、多くを中学校で過ごしてきました。特に生徒指導に長く携わってきました。現状の学校にも良さと課題があり、学園構想にもメリット・デメリットがあると思います。大事なものは両方の良さを比較し、未来の須坂市の子どもたちにとってどちらが有効かを考えることです。

・学園構想で多様な人との関わりを増やし、思いやりや人間関係力を育てることを期待しています。

◆参加者 E

・保育園や幼稚園との連携はどうなっているのか。

・小学校に上がるときにスムーズに接続できるようにしてほしい。

◇市教委

・市内では、保育園と小学校との交流を行っています。「園小接続カリキュラム」を導入し、保幼小のつながりを意識した指導を始めています。今後もさらに連携を強くしていきたいと考えています。

◆参加者 K

・今回の学園構想では、特別支援学校も含めて第2学園を一体的に運営するという計画があり、大変ありがたく思っています。障がいのある子どもたちが地域の子どもと一緒に活動することは、お互いにとって良い学びになります。地域の学校に通いながら支援を受ける「インクルーシブ教育」を進める上でも大きな一歩です。多様性を認め合いながら共に育つ教育の実現を期待しています。

◆参加者 F

・私は現場の教員の立場からお話しします。小規模校の良さもちろんありますが、子ども同士が関わる機会が限られてしまうのが課題です。大きな学園の中で、多様な友達と関わり、共に学び、共に遊ぶことは、子どもにとってかけがえのない経験になります。現場としても、学園構想が子どもたちの成長につながるよう、力を尽くしていきたいと思います。

(6) 学園構想への不安・合意への努力

◆参加者 G

・豊丘地区などでは、学校がなくなることによる不安や不満の声が強いと聞いています。もっと丁寧に説明して、住民の合意を得る努力をしてほしい。

◇市教委

・学校の統廃合や学園化に伴い、地域によって負担感や不安があることは十分に承知しています。今回のように各ブロックごとに説明会を開き、意見を直接伺う場を設けています。引き続き、地域と丁寧に対話をしながら進めていきたいと思っています。

(7) 財政負担・通学区域変更・地域の文化継承の不安について

◆参加者 H

・財政のことをもっと具体的に聞きたい。新しい学校を建てるのにどれくらいの費用がかかるのか。
・通学区域が変わることで子どもが長距離を歩くことにならないか心配している。

◇市教委

・財政については、全体で約30年間かけて段階的に整備を進める計画です。現時点で総額を提示するのは難しいですが、各学園の整備時期に合わせて試算を示していきたいと思っています。
・通学区域については、子どもたちの安全を第一に考えています。新しい学園ができた場合の通学方法（徒歩、スクールバスなど）については、今後詳細を検討してまいります。

◆参加者 I

・地域に根付いた学校がなくなること、文化や伝統が失われてしまうのではないかと心配している。
例えば、地域の祭りや行事に子どもが参加しにくくなるのではないかと心配している。

◇市教委

・地域の文化や伝統は大切にしていきたいと考えています。学園になっても地域行事への参加は継続できるよう配慮してまいります。また、地域の皆さんと一緒に子どもを育てるという姿勢は変わりません。

・今回の学園構想は、子どもたちの未来のために教育の在り方を大きく変えるものです。地域の皆さんと協力しながら、一步一步進めていきたいと考えています。いただいたご意見は今後の検討にしっかりと反映させます。

閉会